
青の乙女と白髭

Dns

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青の乙女と白髭

【Nコード】

N8124Y

【作者名】

Dns

【あらすじ】

最終決戦の後消滅するはずだったアルフィミイはなんの因果かわンピースの世界へ。ogg2からの分岐です。

1. 終わりと始まりですの（前書き）

書いてしまいました。もういつこの方が滞っているのに。設定に関してはちよつと無茶なことも入ります。あとかなりキャラ崩壊がひどくなる予定です。広い心で見てください。

1. 終わりと始まりですの

徐々に機体が燃えていくのを感じる。同時に崩壊も進む。どちらが先に私を殺すのか、できれば燃え尽きたほうが楽でいい。ほんの少しだけ共に戦った仲間たちに別れを告げたアルフィミイはそんなことを思っていた。ほかのアインストよりはよく持っているが死ぬのは時間の問題だろう。後悔はない、敵対した時からこの運命は覚悟していた。むしろ勝利に貢献できたし、仲間と認めてもらえた。あんなにひどいことをしたのに。それがうれしい、同時に悲しくもある。なぜなら、以前は知りえなかったことを理解してしまったから。だから、

「家族、ほしかったですの」

そう、あの仲間たちの中に家族のために戦う人がいた。家族、システムとしての群体ではなく、絆に元づく集合。それは、とても眩しくて、うらやましかった。特に私は極めて人間に近い。だからアインストの中でも特に孤独だった。もっともほかのアインストには個がないが。仲間よりも深い、そんな絆。ないものねだりなのはわかってる。人ではない私に家族はいない。同族は全て滅んだ。本当にたったの一人、ふと仲間たちが私の死を悼んでいるのを感じる。うれしい、けれどやっぱりどこかさみしい。言い方は悪いが結局は近い他人。そう思うと、みんながうらやましい。だってみんなには家族がいる。私にはいない。だから、だから少しだけ願った。家族がほしいと。奇跡の勝利を得たのだから、この位かなってほくれないのだろうか。そんなことを思った。そこで私の意識は消えた。

何故か消える瞬間、ペルゼインが笑った気がした。

ふと気が付くと、どこかに寝転がっているようだ。死後の世界、そんなことが頭によぎる。一応知識ではもっていた、人間の妄想だが。だけど、ここはひどく寝ごごちが悪い。いや、むしろ痛い？ そう思った瞬間目を開ける。広がったのは一面の青い海と空。どうやら私は岩場で寝ていたらしい。道理で寝心地が悪いわけだ。

「というか、ここどこですか？」

疑問を口に出すが当然誰も答えない。あの時、間違いなく私は滅んだはず。ただ死ぬのではなく、チリひとつ残さず消える。それが私の終わりだったはず。なのに今生きている。呼吸が、鼓動が、私は生きていると証明する。ふと気づくと手には鬼蓮華が、ご丁寧にも人間向きのサイズで、握られていた。

「ますます意味不明ですの」

さすがに鬼菩薩はないが、身を守るには十分である。どころか、

「念動力に、これは超感覚？なんでこんなもの使えるんですの？」
持っていなかったはずの力、特に念動力は自分を浮かせ、さらには

短距離テレポートまでできる。ためしたらあっさりできた。当然のようにマブイダチも放てる。実際放ったら轟音と共に海が割れた。ぶっちゃけ無茶苦茶である。リオンぐらいなら一人で倒せそうである。

「この力は、もしかしてペルゼイン？」

かつての自らの愛機、否、半身に思いを馳せる。理屈の通った説明は出来ない。でもこの命は彼に与えられた、そんな気がするのだ。

「だったら、きちんと生を全うしませんとね」

でもさすがにオーバーキルな気もする。改めてこの世界のことを考えるとそう思うのだ。だって機動兵器どころか、飛行機ですらさつきから見あたらないのだ。超感覚もそう言っている。ならばこの世界は人間サイズが基本である。

「まあ、あつて困るものでもありませんし」

ここまで思考をまとめて気づく。すぐそばに人がいると。そこで驚いてしまう。まだきちんと調べたわけではないが半径1キロぐらいにいる人間に気付かなかったのだ。かなりの達人、しかも明らかに警戒している。でなければ気配を消しはしないだろう。とにかく声をかけてみる。

「誰、ですの？」

ずんつと音がしそうな巨体が現れた。前言撤回、鬼菩薩が欲しい。自分が言うのもなんだが、人間なのだろうか。目の前の男は巨人とくにふさわしい、否むしろ魔人だろうか。そういえば女の子の姿をしたロボットがいたなあ、と軽く現実逃避。頭にはバンダナがまかれている。顔つきからして三十代前後だろう。・・・多分。上に来ているチョッキが明らかにサイズがあっていない。ついさ今すぐはちきれそうだ。

「オメエさん、何もんだ？」

考えていたら質問が帰ってくる。

「質問に質問は失礼ではありませんの？」

「ああ、そうだな」

男は頭を掻く。意外と話は通じる？

「俺あ、エドワード・ニューゲート。海賊だ。つっても独立したてで一人だが」

えーと、かいぞく？世間自らずな私でも、それがいかに時代錯誤な言葉かはわかる。というか、この人私は犯罪者ですって言っている。いきなり不安だ。

「私は、アルフィミイと申しますの」

内心を悟られぬように務めて冷静に答える。

「アルフィミイか、良い名だな」

基準がわからない。社交辞令なんだろうか。そっちの名前は何というか。前半はともかく後半はとんでもない。ニューゲートで、人名に使っていいのだろうか。

「そちらはなんと呼びすればよろしいでしょうか？」

「エドワードでもエドでも好きに呼べばいい、それでだ」
なんだろうか。

「とりあえずここじゃなんだから、少し奥にいかねえか、快適な場所とは言えねえがここよりはましなはずだ」

これは、まさか、しかし

「ん？どした？」

「奥で何をしますの？」

「いや少し話を聞こうかと」

「にかこつけて私にアレやコレやするつもりですのね」

「はあ？」

「しかも、私みたいな体型の少女を、そうか、これがロリコンなのですね」

「ちげえ！！つーか普通は売られるかの心配するだろうが」

「な、なんてど外道なんですよ」

「しねえよ、ってか話が飛躍しすぎだ。オメエにやそんなこと感じねえよ」

「つまり・・・」

「なんだ」

「童貞、童貞ですよ」

「なぜそうなる!!」

「好みの女性を前にして行動にでられない、噂に聞く童貞の行動ですの」

「そもそも何でロリコンがそのままなんだ、俺はもっと大人の女が好みだ」

「変態は皆そういうそうですの」

「ひどくなってる!?!」

「変態で童貞、救いようがないですの」

「どっちもねえよ!! 童貞なんて15の時に捨てたわ!!」

「つまり経験済みの変態」

「変態じゃねえ!! 人の話を聞けえ!!」

「嫌ですの」

「即答!?! ってか途中からわざとだろ」

「違いますの」

「何?」

「最初からに決まっていますの」

「ふざけんな!!!!!!」

「ふざけてます!!!!!!」

「な」

たしか、エクセレンはこんな感じで話していたと思う。やってみてわかるのだが、楽しい。

「くそ、なんなんだオメェは」

「アルフィミイですよ」

後に世界最強の親娘と言われることになる二人。そんな二人の出会

いはちつとも運命的ではなかった。

はじめての〇〇ですの（前書き）

ほぼ一ヶ月ぶりの更新です、年末は暇なのでもう少し多く更新する予定です。

はじめての〇〇ですの

「えーと、東西南北の海と大陸あとは島ばかりと」

「そうだ」

「…ふざけてますの？」

とりあえず異世界っぽいのでエドにいろいろ聞いてみたのだが、地理からぶっ飛んでいた。平行世界というものがあるのだから今までの常識（知識しか無いけど）が通じないのは覚悟していた。けどちよつと無茶苦茶じゃなかるうか。どんなことがおこればそうなるのかさっぱりである。しかも極めつけが、

「偉大なる航路、ですか」

世界を一周する航路、その両脇には無風の海域にして超巨大生物の巣窟、風の帯。偉大なる航路も全く一貫性のない天気、方位磁針が通じない危険航路。どっちかって言うとな魔の航路とかそんな名前が似合いそうな感じがする。で、今いるのが。

「まさに偉大なる航路ってわけだ」

「ドヤ顔やめてください」

自慢げに言うな。えーと一生懸命生きようって思っていましたけど、いきなりなんですかこれは。キョウスケでもこんな賭けはしませんよ。

「ドヤ顔ってなんだよ」

「さつきみたいな顔ですの」

エドは人の気も知らないでのんきだ。

「でだ、こっちも聞きたいことがある」

きた、私が何者か、それを聞こうとしているのだろう。さつきも訪ねてきていたし。

「おめえさん、親はいるかい？」

「はあ？」

えーと、ちよつと素になってしまった。今このおっさんはなん

て言った？

「今なんて」

「だから親御さん入るのかって聞いたんだ」

「いや普通そこじゃなくて私が何者か聞くもんじゃありませんの！？」

自分で言うのもなんだが、怪しさ満点な私に何も聞かないのはちよつと無用心すぎないか？

「ん？ ああ今まで聞いてきたことからオメエさんはどっか遠いところか来たってのはわかったからな。それだけ聞けりゃ十分よ」

「なぜ、ですの？」

「オメエさんは、よくわかってねえんだろ？」

図星、まさにそうだ。説明できる訳がない。なにせ自分のことがよくわからないのだ。ペルゼインがくれた命だということ以外何一つ知識と体は一人前だが心が伴っていない。しかも知識は世界が違ふせいでほとんど役に立たない。こんな状態で何を説明するつもりだったのだろうか。

「それにだ、女の秘密をのぞく趣味はねえしな」

にやつと笑ったその顔はちよつとかつこよかった。

「変態のくせに」

精一杯の罵倒、ああこれが照れ隠しなのか。

「まだ言うか。ま、それはともかくさっきの質問に戻ろうじゃねえか」

「親、ですか」

これまた難しい。だって私は親を殺したのだ。いやまああれをお父さんもしくはお母さんと呼ぶのは難しいが。ここはまあはぐらかしておくか。

「いませんの、ちなみに家族も」

家族と口にだし、ふと思うやっぱりさみしいと。

「そうか、やっぱりな」

「やっぱり？」

「さっき見たときどうも寂しそうな目えしてたからな、それも離れたんじゃなくていいって再確認したときみてえな」

どんな目だ。すごい観察力だよこの人。でも事実だ。私には待ってくれる人がいない。せいぜい向こうで葬式でもしてくるくらいだろうか？それも怪しいけど。

「それでだ、提案っていうか、勧誘っていうか」

「なんですの」

さっきまで、の態度とは一変なんか恥ずかしそうに言っている。ぶっちゃけキモイ。

「うん、キモイですの」

「ひどくね!？」

「いや、その体のサイズで恥ずかしそうにくねくねされると背中がゾクツとしますの」

「それでも口に出しているか？」

「いいましたの」

はあーとため息をつかれた。でも、言っとなかないといけないそんな気がしますの。

「まあなんだ、話を戻すとだな、…俺の娘にならねえか？」

「…やっぱり」

「ん？どういうことだ？」

「やはりあなたは・・・ド変態でしたのね」

「だからなぜそうなる!？」

「血の繋がらない親娘同士で、アレやコレをする。もはや救いようがありませんの」

「そんなつもりは一ミリもねえよ」

「じゃあ私は魅力がないと」

「別にそういうわけではって泣いてる!？」

「ひどいのですの、女性に向かってそんなことが言えるなんて」

「一言も言っただけ、つかむしろ可愛いだろオメエは」

「…本音が出ましたのね、やはり変態ロリペド野郎ですの」

「嘘泣きかテメエ!! つうか俺の好みはオメエみたいなチンチクリンじゃねえ!!」

「チンクリ…」

「言わせねえよ!!」

「…ツチ」

「わざとだったんだな」

「まあ冗談はさておき」

「いきなり戻んなよ」

「このままだと話は平行線ですよ」

「誰のせいだ!!」

「私のせいですよ!!」

「無い胸張って言うな!!」

「んなっ!! 気にしていることを!!」

「たまにはやり返してやるさ」

「エドのくせになまいきですよ」

「はっ、悔しかったら胸を大きくしてみやがれ!!」

「もういいですよ、ちょっと本気で泣きそうです」

「あ、スマン」

なんて、何て締まらない会話なんだろう。なのに、なんでこんなに楽しいのだろう。これが、私の求めていたものかな？

「…」

「…」

「始めに言っておきたいですよ、この話を聞いてそのまま立ち去っても構いませんの」

「いきなりなんだ？」

「もしもそうなるのだとしたら嘘は付きたくないですよ」
そこから私は話し出した。私がなにもので何をしてきたのか。もちろん、あの親殺しも。

「ひとつ聞きてえ」

話終えて返ってきたのはそんな一言だった。

「なんですよ」

「オメエさんは、その親を愛していたか？」

「それは間違いなく否ですよ」

それは間違いない。そもそも愛された覚えもない。

「：そうか、だったら俺は愛される親父を目指してやる」

「いいですよ？」

「当然だ、オレあなはぐれもんで家族を作ろうって思ってたんだ。愛してもらえなきゃ家族どころかあつという間に敵だ」

「もしも、家族から敵になったら？」

我ながら意地の悪い質問だ。

「そんなときは素直に刺されるさ、わるいのはオレだからな」

器が大きい、そう思えた。この人は見栄だとか誇張じゃない本当にその覚悟をもっている。

「オレアなオヤジになるってことはそうなんだと思っている」

と豪快に笑っていった。クスッと笑ってしまった。

「さっきのキモイオッサンと同一人物とは思えませんの」

軽口と共に、

「あーあれは忘れてくれ、二度としねえ。：それでだ、返事はどうなんだ？」

「催促だなんて野暮ですよ」

「うるせえ、気になるんだよ」

「もちろん、娘にさせて欲しいですよ」

「本当か？」

「マジですよ」

エドはその一言で嬉しそうに手を握り締めた。

「これで一人目だ、こっから始まるんだな」

「そういえば父上」

「なんだ、ってなんて呼びゃいいんだ？」

「アルフィミイでいいですよ。間違ってもアルって呼ぶのは許しませんけど」

「了解だ、でなんだ？」

「いえ私たちは海賊になるんですよね？」

「まあそうだな」

「その一味の名前は？」

「まだ二人だけで一味ってのもなんだけどな。白ひげ海賊団って名乗るつもりだ」

「…えーともしかしてそ無精髭は」

確かに白いけど、

「ああこいつはまだ未完成だ、最終的にはだな」

そういう取り出したのは不敵な笑いに三日月のようなヒゲをつけた、ドクロマークだった。

「こうなる予定だ」

「これって人間のヒゲですか？」

「当たり前だ」

のちの最強の親娘はこうして家族の契を結んだ。出会いは運命的ではなかったが今この瞬間は運命を感じる二人だった。

はじめての〇〇ですの（後書き）

感想、意見まっています

誓いを立てるですの（前書き）

今回は残酷描写なうえにコメディー色が薄いです。苦手な方はブラウザバックを

誓いを立てるですの

「とまあいい感じの話にはなりましたが、これからどうしますの？」

「んーとりあえず、家族集めってとこだな。さすがに二人じゃカツコがつかん」

そう言われてふと疑問がわく

「父上は今までどうしていましたの？」

「一応海賊団で船員やってただけだな、喧嘩して別れた」

：なぜだか嫌な予感がする。こう何というか、フラグっぽいような。そう思っていたら、

「父上、ものすごい殺気が近づいているんですけど」

「んん？あいつらあのくらいで怒んなや」

いやいや、ちょっと洒落にならない殺気が近づいているんだけど。

「ちなみに何をしましたの？」

「全員海にたたき落としてお宝全部と食料を八割、あと小舟を一隻もらってった」

うん、絶対怒る。つかブチギレる。それって喧嘩ですか？

「何言ってやがる、命と食料は置いてったんだ。ありがたく思えってんだ」

「父上はそんなことやられて平気ですの？」

「なわけねえだろ」

ああ、分かってやってるんだ。すごい笑顔で言ってる。まあいいか、

「じゃあ、初の共同作業ですのね」

「親娘としてな」

海岸から声が聞こえる。罵声、怒声、金切り声。うん、間違いない「雑魚ですのね」

「おいおい、偉大なる航路の海賊を雑魚呼ばわりかよ」

「ええ、だって」

「だって？」

「品がありませんの」

そう言い鬼蓮華を抜く。父上はそれを見てほうと感心する。ちよつと嬉しい。

「そいつは業物か？」

「いいえ、私自身、ですの」

しゃらんと鳴る。さてはじめよう

「戦闘開始、だな」

「蹂躪の間違いですよ」

「そうだな」

父上は豪快に笑った。その手には、鉄塊と言ってもいいような青龍刀を握り。龍虎王のよりかっこいいと思った。

それじゃあ、蹂躪を始めましょう。

「エドワードのやろうどこにいやがる」

船員の一人が言う、明らかに苛立っている。正直、奪われたのは腹が立ちはしねえ。俺たちは海賊だ。奪い奪われ、ならば最低限のプライドとして奪われる覚悟はしている。だからエドに殺されても文

句はなかった。のだが、

「舐めやがって」

情けをかけられた。こう見えても5000万を超えた一端の海賊だ。その額には誇りをもっている。はみ出しものだからこそ、そこだけは守る。だが、泥を塗られた。あいつと戦って生きていられるのは本来奇跡だ。船長をやれたのはあいつが断ったからだし、みのがしでもらったのは運がいいと誰もが自覚している。しかしだ、あんな理由でプライドをずたずたにされるのは勘弁ならねえ。だから殺る、たとえ刺し違えてもこのままじゃ収まらねえ。

ヒュンッと風がなった。そして轟音と共に地面と海が割れた。船員が斬られている。そして、ズルリと俺の視界がずれた。

「船長がやられたアアア!!!」

マブイダチで一番立派な格好をしているのを斬ったが、どうやら船長だったようだ。

「おいおいいきなりかよ」

「当たり前ですの、か弱い私が斬り合いなんて出来るわけありませんの」

「嘘付け」

軽口のやり取り、我ながらさつき家族になった同士とは思えないほど自然なやり取り。そして思う、私たちは家族になれたのだと。意外とあっさりてにはいつてしまった。

「俺もやるか」

短い一言共に父上が腕に力を込める。握られた青龍刀の先に歪みが

見える。《グラグラの実》、振動を操る能力、父上いわくまだ上手く制御できていないらしい。その父上は青龍刀を振るった。衝撃波が相手を襲う。轟音とともに船員が吹き飛ばされる。時折、いや多くの相手から断末魔の悲鳴が聞こえる。何人かは生き残ったようだ。生きててもはや立つのも困難なようだが。その中の一人が叫ぶ。

「デメエ、なんで裏切った!？」

「うらぎるだあ? はじめに裏切ったのはてめえらだろうが」

「俺たちは海賊だぞ、あれのどこが悪い!!」

「海賊だからしちやあいかんだろ、アホンダラ」

彼らがしたことは簡単には聞いた。正直、そのことに関しては相手の自業自得だろう。約束を破ったのだから

「奴隷なんてのはな自由を愛する海賊が一番憎むもんだよ!!」
そう、奴隷のための人さらい、父上はそれが許せなかった。しなうと言われたから仲間になったのに。

「デメ・・・」

そこで私はそいつの首に刃を突きつけた。

「もういいですよ」

にこりと微笑みながら、

「いって、どういうことだよ」

声が震えている、でもどうでもいい。

「あなたがたがどういう考えでそうなったのかは知りませんが」
そう言い、すつと刃を引く

「父上を裏切った、それだけであなたがたは重罪ですよ」
鮮血が舞った。

「大丈夫か？」

「なにが、ですか？」

「オメエさんこういう戦いは初めてだろう？」

「そうですね、でも」

「でも？」

「人を殺すのに大差はありませんの、機械越しでも、直接でも」

嘘偽りない本音、この程度でどうこうなるようなやわな私ではない。

「そうか」

父上は一言、でもそこに感じたのは氣遣いだった。血まみれの砂浜、でもそこに親子の絆を感じていた。私たちは共二血に汚れると。それが、私たちの家族のあり方だと。ポフツと父上にもたれかかる。

「暖かいですよ」

「好きなだけそうしてろ」

少し疲れた、そんな時に支えてくれる人がいる。だから私は、強くなる。もっと向き合えるように、そして支えられるように。

誓いを立てるですの（後書き）

意見感想まっています。批判でもオツケーです。とうかさみしいです。プリーズ感想。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8124y/>

青の乙女と白髭

2011年12月28日17時52分発行